

難波西鶴

海の道

【99】

森田 雅也

前回は西鶴と明石の関係について述べました。明石は西鶴と同門の談林俳諧文化圏でした。

西鶴と同時代、旧派の談林などから独立し、新風俳諧をおこしたのが江戸の芭蕉でした。その芭蕉も貞享4(1687)年『笈の小文』に記されているように、須磨見物の後、『明石夜泊』と題して句を詠んでいます。「蜻蛉やはかなき夢を夏の月」

っています。「蜻蛉の句」は、実景ではなかったのです。

現在、この句碑は前回書いた明石の人丸社にありま。当時も明石の名物は蜻蛉漁でも知られていました。仕掛けた蜻蛉の中でつり上げられるのも知らず、はかなき夢を結ぶ蜻蛉。それを照らし出す夏の夜の月。人の明日の運命を知らぬ人生にも似た蜻蛉の愚かで哀れな姿。いかにもすくれた芭蕉の句ですね。

芭蕉は『奥の細道』の旅では多くの俳人、門人仲間を訪ね、数待され泊めてもらっています。他の旅も同様です。ですから、明石にはよほど泊まる伝手がなかったと言えるでしょう。これは決して明石に芭蕉をもてなすことができるレベルの俳人がいなかったということではありません。むしろ逆に、芭蕉レベルの俳人が多くいて、彼らは西

実際は泊まらず日帰り

鶴と同門の談林俳諧仲間として、裏切った芭蕉の来訪を拒んだと推定できるので

す。もっとも、この場合、明石俳人が芭蕉を拒否したという資料が全くないことから考えると、芭蕉自身が嫌がったか、単純に避けた可能性が高いでしょう。西鶴と明石俳人とは、それほど強いつながりだったので

す。芭蕉は大坂から舟で兵庫に着いた後、須磨・明石まで歩いていきます。西鶴も明石へは舟路でした。明石は大坂からは「海の道」で一駅目の近郊地であったと言えるでしょうね。

(関西学院大文学部文学言語学教授)

江戸の芭蕉名句「明石夜泊」